

私のトライアスロン

船谷 越 修



30歳を迎え、競技生活（クロスカン트리スキー、駅伝等）の現役を退こうとしていた頃、ただ忙しく過ぎてゆく毎日の生活の中で「本当にこれでいいのだろうか」「まだ何かやれるのじゃないか、いや、やらなきゃ」という気持ちは残っていた。そこに皆生トライアスロンがあった。83年の夏、第2回大会。参加す

ることだけでとてつもないことに感じられ、迷った末に申し込み、参加料を払い込んだ時点でふんぎりがついた。大金を払ったからにはやるしかない。

トレーニング方法もわからず、自転車は借り物、何もかも未知の世界だった。海に向かってスタートする時の緊張と不安は・・・やった者でないとわからないでしょうね。

バイクを降りてはみたものの両脚ケイレンでランにならない。あの脚の痛みも、やっぱりやってみないと・・・。

「こんな馬鹿げたこと、二度とやるものか」と、ブツブツ言いながらゴール。でも十分後には「また来年もやってみるか」こんなことをくり返しながらから13年。

振り返ってみると、よく今まで続けてこられたものだと思う。続けることができた一番の理由は女房をはじめとする家族の理解があったからだが、13年間に知り合った多くの仲間に助けられたことにも感謝。

「Team Lahg Lauf」は4人で始まり、今も4人でぼちぼちやっている。どこの大会に行っても帰りのワゴンの中では私にビールを飲ませてくれ、運転をしてくれた素晴らしい友に感謝。本城サイクル、西部消防の皆さん、その他本当にたくさんの友達に励まされ、助けられてここまで続けることができた。そろそろサポートの立場にと思いながら、また今年も皆生に申し込んでしまった。ここまでやったのだから、やれるだけやってみようと思っている。

トライアスロンの魅力

下田 智明



私がトライアスロンを始めて早10年が過ぎました。10年前はトライアロンブームに火が付きはじめたころであり、宮古島大会や琵琶湖大会が初めて開催されたころでもありました。私はちょうどこのブームにのっかって第1回琵琶湖大会に初挑戦しました。

その後、これまでショートタイプを含めて20回程度完走しましたが、トライアスロンの魅力は何といっても完走したあとの充実感です。しかもこの充実感は順位に関係なく完走したすべての人が味わえるものです。「完走者全員が勝利者である。」という言葉がトライアスロン競技の特徴を一番よく表していると思います。

他の競技ではなかなか得られないこの充実感、完走までの過程が人生そのものに

類似しているために得られるものであると私なりに考えます。ここで、トライアスロンと人生に共通しているものを挙げてみると、まず第1に「自分との闘いである。」という点です。人生においても苦しさを乗り越えて初めて道が開けるように、自分に打ち勝つことが完走への第1歩だということです。2番目は、「他人の協力が必要である。」という点です。ボランティアの皆さん、沿道の皆さんの激励、声援、協力に、私は何度も力づけられました。人生も1人で頑張っても、行き詰まってしまうでしょうもない時があるものです。そんな時に他人の協力や手助けはありがたいものです。

最後は、「大自然との闘いである。」という点です。ご存じのように、例年、皆生大会はうだるような炎天下のなかで開催されますし、私が最初に挑戦した琵琶湖大会も台風の真っ只中で開催されました。水温も気温も低くて天候も豪雨に見回れました。このように、自然条件は大会当日にベストの条件になることは滅多にないでしょう。こうした自然条件に対応できるような対策なりレース運びを考え、時と場合によっては無理をしないことも大切です。

以上、私にとってトライアスロンとは人生そのものであるということです。しかも1日で3回（水泳、自転車、マラソン）分の人生が楽しめるというトライアスロンは最高のスポーツではないでしょうか。